『白い家』

1. 奈緒

　はじめて泉を見たとき、単純にすごく綺麗な子だと思った。

　着ているものはそっけないほどシンプルで、ジーンズと無地のシャツをよく着ていた。いつもスニーカーで、化粧は一切しないで、肩の下で切りそろえた髪も、染めずにそのままだった。その飾らない装いが泉にはよく似合った。

よく大学の構内で見るような、金魚の尾ひれのような軽やかでふわふわの服を着ている子たちとは、全く違った雰囲気を持った子だった。可愛いのにどこか頼りなくて、短すぎるスカートや、無防備に出た肩のラインがだらしなく男の子たちの視線を誘う女の子たちとは違い、彼女はどこか周りを遮断しているような空気を纏っていた。泉の周りには体を上に上に引き上げる見えないピアノ線がいくつもついているようで、その佇まいはときどきはっとするほど美しかった。

　泉は大学の同じクラスで知りあったけど、大学が始まって三か月、泉には誰も仲のいい友達がいないようだった。

　大学にはちゃんと毎日来ている。挨拶をされればきちんと返す。愛想が悪いわけでも、暗いわけでもない、ごく普通の子だったけど、泉はいつもひとりでいてもどこか完結しているようで、周りに誰もいなくてもちっとも淋しそうじゃなかった。自分のありのままの状況をそのまま受け入れて、それで充足している、いつもそんな風だった。

　でも、クラスのみんなは、男子も女子も、みんな泉をどこかで気にしていた。目立たないけど、よく見ると確実に綺麗な子、アイロンがかかった白いハンカチのような、ぱりっとした清潔感のある子。それが泉だった。

「川村さんって、シャンプーとか、洗剤のCMに出てきそうな子だよな」

　クラスコンパの幹事の男の子が、出欠の確認をしに泉に話しかけた後、そんなことを言っていた。なかなか真理をついている。

結局、泉はクラスのほとんどの子が出席したコンパに、用事があるから、と言ってこなかった。

　泉に初めて話しかけたのは、昼間のランチだった。

　大学に入るまで、ひとりで本ばかり読むガリ勉だったから、正直、大学の雰囲気に疲れ切っていた。女の子はみんな髪を明るい色に染めて、マニキュアを塗って、可愛いスカート姿で学校に来ていた。

構内に響く、男の子に対する媚びを充分に含んだ甲高い声も、繰り返されるサークル交流という名のコンパも、必修科目のノートを貸しあうのも、ほとほと疲れ切っていたのだ。

ひとりでご飯を食べられる場所を探して、中庭に出ると、そこに泉がいた。

　泉は、ひとりで中庭のベンチでサンドイッチを食べていた。いつもと同じように、インディコ色のジーンズと、水色の長袖のシャツを着ていた。アイロンがきちんとあてられており、姿勢よく、静かにサンドイッチを食べながら、文庫本を読んでいた。隣に友達がいないことも、ランチの時間に話し相手がいないことも、まったく頓着していないようだった。

　その凛とした姿に、入学式の日から、あたしはきっと憧れていたのだと思う。

「川村さん、だよね？」

　あたしは思い切って声をかけた。

「うん。」泉はあっさりとうなずくが、明らかにあたしを認識していなかった。こちらがどぎまぎするほど、まっすぐに人の顔を覗き込んでくる。日差しが強いのか少し目を細めながら。

「同じクラスの上野奈緒です。覚えてない？　毎日教室で会ってるけど」

「……ああ、思い出した。まえに、授業が始まる前、『西瓜糖の日々』を読んでたよね。ブローティガンの」

「よく知ってるね」

　びっくりした。ブローティガンは、その内容というより文章のリズムに惹かれて、何度も繰り返し読む作家だ。同学年でこの作家を知っている人間に会うのは始めてだった。

「ここ、座ってもいい？」

　泉が、不思議とためらわず、バックをよけたので、あたしは泉の隣に腰を下ろした。

「暑くなってきたね」

「そうだね」

　共通点がないので、当たり障りのないことしか出てこない。泉は同意したものの、ちっとも暑そうじゃなかった。汗もかかず、かすかにそよいだ風が、泉のまっすぐな髪を撫でていった。

「川村さん、いつもひとりでご飯食べてるの？」

「うん。そうだね。だいたいひとり」

「淋しいとか、思わないの？」

　泉は不思議そうにあたしの顔を見ていた。しっとり濡れているような睫毛と黒目が、子どもみたいだ、と思う。しばらく、考えて、ゆっくり、

「うん。最近は、前より淋しくないかな」

「前より？」その言い方が変わっていてのが可笑しくて、なんだか笑ってしまう。

「……うん。前より、だいぶ淋しくなくなった」

　泉は何かを思い出してるみたいに、噛みしめながら話した。

「そうなんだ。あたしは最近ホームシックだよぉ。実家が恋しくてさ」

「実家？　実家ってどこなの？」

「まぁ、群馬だから、すぐ帰れるっちゃ帰れるんだけどね」

　泉は話すテンポがゆっくりで、簡単なことを答えるのにもいちいちしっかり考えているみたいだった。

「川村さん、実家このへんなの？」

「うん。でも子供のころは違うところに住んでた。いまはおばあさんと」

「子供のころ、どこに住んでたの？」

「軽井沢」

　泉はそこまで言うと、膝の上に広げたサンドイッチの一切れを差し出し、

「ご飯まだだったら、よかったら食べない？」

「え？　いいの？」

　泉のくれたサンドイッチはコンビニで売られているようなものではなくて、ちゃんとした手作りのものだった。卵とハムが挟まった、ごく普通のサンドイッチだけど、シンプルな茶色のペーパーナプキンで包まれたそれは、とても泉らしい食べ物だと思った。

「うん。あたし今日はもう授業ないから。さようなら」

　そういうと、ハンカチを畳んでさっさと席を立ってしまった。残されたあたしは、先ほどの泉と同じようにサンドイッチをひとりでベンチに腰かけてほうばる女の子、だったけど、ちっとも様にならなくて、居心地が悪いまま、そのサンドイッチを飲み込んだ。

1. 蒼介

　目の前を、あいつが通り過ぎた。

　目があった。

まただ、と思う。自意識過剰ではないはずだ。あいつは、いつも俺を見ている。しかも一瞬。視線に気づいて目を向けると、もうあいつの視線は俺からはずれている。あの冷ややかな流し目で、いつも一瞥だけくれてそのあとは一切無視を決め込む。話しかけるわけでもない。でも、あいつは確実に俺のことを知っている、と思う。不思議な確信があった。

どこで会ったのだろう。あいつを見るたび、考えている。向こうが自分のことを知っていて、自分が相手のことを思い出せないのは、弱みを握られているようでひどく居心地が悪い。

俺はあいつとどこで会ってる？

　相変わらず色味のない服を着た背中を目で追う。服装や髪形がシンプルでそっけなさすぎて、カラフルなほかの大学生の中で、逆に目立っている。こんな自己顕示欲の塊みたいな大学生の中に入ったら、いっそ色味のないスタイルでいるほうが目立ってしまうことくらい、早々に気づきそうなものなのに。

「蒼介、いっつも川村さんのこと見てない？」

　となりに座った女が腕を引いた。風が吹けば舞い上がりそうなスカート、腕に何個も付けたチープなアクセサリー、ゆるくふわふわのカールのかかった髪の毛。ごく普通に可愛い女だと思う。顔も、そしてもちろん頭も。

「あの人、川村っていうの？」

　俺は顔を近づけて話した。そんなことは何でもないという風に。君と話してるほうが楽しいよ、と囁くみたいに。

「名前、知らなかったの？」

　くすぐったそうに女が言う。そろそろこの女の名前のほうを思いださないと。

「うん。知らない。このあと授業？」

「結衣？　ううん。入ってないよー」

「そう。助かった。どっか行かない？」

「いいね」

　女が髪につけている甘ったるくて安くさい香水の香りを吸い込む。俺は安心して立ち上がった。

　ほんと、助かった。お前が名前、自分から言ってくれて。

　俺は水の音を聞いている。

　タイルを叩く、雨のようなシャワーの音だ。渋谷のファミレスから、レコードショップ、スタバに立ち寄り夕方のラブホテルにたどり着くまで、正味２時間半だった。すぐにやらせてくれるという噂にたがわず、ここまであっけないほど簡単にたどり着いた。こんなにあらゆることが単純に進んでしまうと、自己嫌悪を通り越し、くだらない三流映画を見ているような客観的な気分になるから不思議だ。

　あいつとは、こういう遊びの過程で知り合った女ではないはずだ。

　部外サークルの交流会、一年間通った予備校、高校時代の同級生、高校時代に文化祭で知り合った他校の女子高生……

　自分の記憶に眠る女の顔を新しい順に思い浮かべていく。あの他者を寄せ付けないような背中の女にはなかなかたどり着かない。

　どこだろう。俺はあいつとどこで会ったんだ？

　バスルームからバスタオル一枚巻いただけの姿で、結衣が出てきた。

　ばさっと音を立てて、広いベッドの端に飛び乗る。

「なあ、お前さっき川村なんとかって人のこと、言ってなかった？」

　結衣は露骨に嫌そうな声を出す。たしかにこのタイミングはまずかった。

「なぁに、また川村さんのこと？」

「いや、俺じゃなくてさ。篠原っているだろ、俺のクラスの。あいつがね、さっきの川村さんのことを、かわいいかわいいって言うからさ」

　この嘘がなかなか気に入ったらしく、結衣は笑って教えてくれた。

「ああ、そういうこと。でも川村さんは無理だよ。クラスコンパにも来ないし、いっつもひとりだし。たしかに綺麗な顔してる人だけどさ、どこがいいの？　なんかあの人ってあたしたちのこと見下してるかんじじゃない？　馬鹿にしてるっていうかさ」

「まあ、そう言うなって。万が一ってことがあるじゃん。川村さん、下の名前は？」

「えっとね、泉だよ。川村泉」

「へえ、高校は？　どことか言ってた？」

　俺は話しながら、頭の中のアドレス帳を大急ぎで捲っていく。

「たしかね。高校は行ってないんだって。大検かな？　あとフリースクールとか？」

「ああ、たまにいるよな」

　俺は話をそこまでにして、本来の目的を達成することにする。少し濡れた髪を触ると、結衣はくすぐったそうな甘い声を出した。

　川村　泉

　頭の中にその名前をメモする。あとで家に帰ってから、本格的にあの女を探し出さなくてはならない。

　小、中、高と歴代の卒業アルバム、ボーイスカウトの写真、昔のアドレス帳にはナンパで知り合った女の名前も入っているはずだ。探すべき場所が頭の中にいくつも浮かんでは消えた。頭の中でめったに鳴らない警報機がひそかに点滅している。

　思い出せ、思い出せ、思い出せ。

　あの女は誰なんだ？

1. 樹

　信号が青に変わると、横断歩道を駆け足で渡り切った。

　人の波を抜け、目的のホテルラウンジを目指す。約束の時間まであと５分弱。泉はきっともう着いているだろう。

　走りながら、やはり自分は泉に会いたかったのだと思う。いつも泉に会うと、横腹が痛むような、いますぐここから立ち去りたいような居心地の悪さがあったが、しばらく会わないと、彼女の頼りない背中が思い出されて、すぐにまた電話をかけてしまう。会っている間は、どういうわけか年下の少女相手に何かを見透かされているようで不快なのに、心のどこかではいつも彼女のことを気にしてしまう。

　泉は僕のことをどう思っているのだろう。

　宗一郎と違い一緒に育ったわけでもないのに、すっかり彼女の保護者気取りの男。勝手に自分の祖母の家に住まわせ、定期的に自分を呼び出し、小言めいた助言を与える大人。

　さぞ迷惑だろう。せっかくあの『白い家』から抜け出せたのに。

それでも僕は泉のことが心配だった。

あんなところで、普通の生活とはかけ離れた思春期を過ごして育った人間が、いざ普通の生活に戻ったところでまともに社会に適応できるわけがない。自分もまわりの人間に比べれば変わったバックボーンを持っていると思っていたが、彼女の境遇の異常さは僕の比ではなかった。泉のことを気にかければ気にかけるほど、あの家の人間の神経が信じられなかった。

　泉はあの気狂いの老人と、ひとりの少年に、人生を狂わされたのだ。

すでに泉に良識ある大人である身寄りがない今、彼女をきちんと成人させ、社会に送り出すのは、あの一族の系譜に、本筋ではないにしても関わった僕の義務だと思う。

それを彼女が望まなくても。

あまり東京の地理に詳しくない泉のために、渋谷からほど近い丸の内のホテルラウンジを指定した。泉は窓際の席にすでにこちらに背を向け座っていた。肩の下で切りそろえられた髪が陽に透けている。

「泉」

　席に着くと、彼女はすっと立ち上がって頭を下げた。

「お久しぶりです」

「久しぶり。学校には慣れた？」

　泉を座るように促して席に着いた。相変わらず背中に定規があてられているように姿勢がいい。

「はい。電車通学にもだいぶ慣れました」

　泉をこうして真正面から見る機会は、これまででも数えるほどしかない。最後に会ったのは彼女が大学に入学する直前だった。

泉の華奢な体に、丸襟の青いシャツがよく似合っている。ブルージーンズにスニーカーというホテルラウンジのドレスコードには相応しくない服装も、彼女の学生らしい清潔さをよく引き立てていて、周りの大人たちも微笑みながら見逃してくれそうな雰囲気だ。

　あの『白い家』にいた頃の泉を見たのは、実は二回しかない。一度は宗一郎に呼びだされたのだ。いつものように白い便箋に几帳面に綴られた手紙に従って、雪深い二月に延々電車を乗り継いで会いに行った。そのとき泉は制服のような白いシャツに紺か黒の膝丈のスカートを履いていた。しかも服装はとても女の子らしいのに、髪はベリーショートに近く刈り上げられていた。真っ黒の髪に、理知的な瞳が印象的だったが、彼女のスタイルはあまりにもそっけなく禁欲的で修道女のようだった。あれはたぶん、泉の意志でされていた髪形ではなかったのだと、今でこそ思う。

泉はあれからゆっくりと髪を伸ばし、今は肩の下で切りそろえられたままにしている。服装は相変わらずシンプルなものだったが、僕の祖母が趣味にしている洋裁で仕立てられた、適度に柔らかく、明るい色のシャツを身に着けている。

「友達はできた？」

「はい」

　泉はゆっくりと言う。

　運ばれてきたコーヒーを飲みながら、当たり障りのない会話が続く。法学部の授業の話、第二外国語でとったフランス語の話、つい最近まで自分も大学生だったくせに、どこにでもありそうなありふれた泉の大学生活の話題は、不思議と新鮮に、輝いたものみたいに聞こえる。それだけ自分が社会にもまれて、薄汚れてしまっているのだと思う。

　学生生活の様子を几帳面に話す泉を眩しく思いながら、それでも彼女との会話は、いつも一枚薄い膜のようなものがかかっていて、どこか表面的な話題に終始していた。

　僕はほんとうに聞きたいことを意図的に隠している。

　そして、それは泉も同じなはずだ。

　彼女が『白い家』を出て、残りの高校過程を終え、大学に入った現在も、泉からあの家の話を聞いたことは一切ない。

　僕はあの家の正確な間取りですら、頭の中に描けなかった。

　泉があの家のどの部屋で眠り、どこで勉強をし、どうやって過ごしていたのか。

ほんとうは一番聞きたいことなのに、その話題を出すのははばかられた。その話題を出した以上、宗一郎との関係を、一緒に兄弟のように育ったとか、よく可愛がってもらったとか、そんな通り一遍の言葉ではなく、もっと深く問いたださなければいけないような気がしていた。

「そろそろ行こうか。ゆっくりしたいとこだけど、これから仕事なんだ」

　僕は伝票をもって立ち上がった。

　隣に並んだ泉は、座っているときよりもずっと背が高くて、大人びている。丸襟の青いシャツが造り出す控えめな胸のふくらみから、僕は慌てて目をそらした。

1. 絹江

　そろそろ夕飯の支度をする時間だった。

　ゆっくりと立ち上がり、ちゃぶ台にのった湯呑を片付ける。

　夕飯の支度といっても、自分と泉の分だけなので、大したものを用意する必要はない。泉は好き嫌いがなく、白いご飯とお味噌汁、焼き魚と野菜の副菜一品で満足してしまうような子で、かえって学校帰りに米や重たいペットボトル入りのお茶などを買ってきてくれるので、ひとりでいるころより逆に助かっているくらいだ。

　ひとり。

　樹が家を出て行って、ようやく自分はひとりになるのだと思っていたが、泉は不思議なタイミングで自分の前に現れた。

　自分の孫の異母兄弟と一緒に育った少女。

　私は東京の下町で生まれ、少女時代に疎開先で終戦を迎えた。その後、両親とともに焼け野原の東京に戻り、そこで見合い結婚をし、美保子を生んだ。

　一人娘の美保子は、子どもの頃から活発な子だった。物おじせず、まわりの商店街の大人にもしっかりとした口を利く、親の私からしても、驚くようなことを平気でするような子だった。

　ひとりで勝手に大学を決め、必死に受験勉強をしたかと思うと、社会勉強と称して朝から晩まで遊び歩き、それでもどうにか四年で単位をそろえて大学を卒業した。見合いでもしてくれるのかと期待したが、美保子は自分で就職先を出版社に決め、スーツ姿で忙しく働くキャリアウーマンになった。

今は女性も何でもする時代だからね。

一人娘に人一倍甘かった夫はそう言いながら、大手出版社で働く娘を自慢に思っていたようだったが、美保子が入社三年目で妊娠し、しかも相手の男性と結婚もせずひとりで育てるといったときは、さすがに驚いていた。

相手の男性の名前を、夫の源蔵には決して言わなかった娘だったが、私は樹の父親の名前を、かなり早い段階から聞いていた。向こうが、美保子が子供を生むことも承知している、ということも。

澤野祥太郎さんって言うのよ。お母さんは知らないと思うけど。

もちろん、私はその相手の名前を知らなかった。だから図書館に行き、経済雑誌をいくつか読み、そこでその男の名前を見つけた。美保子が言ったとおり、相手の男は有名な製薬会社の御曹司で、美保子が妊娠したときにはすでに、ある外交官の一人娘と結婚していた。

父親を知ったところで、どうしたものでもない。

美保子が一度決めたことを曲げないことには、とうに観念していた。苦労をしてでも生みたい男の子だったのだと、納得するしかない。

一家の主婦としてしか働いたことのない自分がすることは、やはり家族の食事を作り、洗濯をし、家を綺麗に整えることだった。ボタンが取れたといえば縫い付けてやり、明日までに雑巾が必要だと言われれば朝までには縫い上げた。

じきに夫が亡くなり、出世した美保子は仕事がまずます忙しくなり、会社近くにマンションを買い、そこから会社に通った。

美保子がひとりで生んだ子どもである樹は、母親と違い、どちらかというと内弁慶でおとなしく、友達と外で遊びもしたが、本質は一人遊びが好きな子どもだった。大勢の子どもたちと一緒にいなくてはならない場所では、一生懸命そこに馴染もうとしていたが、家に帰ると自家中毒でも起こすのかよく熱を出した。気立てが優しいのか、いつも友達が多かったが、大きくなってからは大人数でいてもふらりと別の場所に行ってしまうような子だった。

高校生になった樹は大学受験に失敗し、一年間の浪人生活を送ると、その後私立の医学部に入り、やはりこの家から大学に通った。

その間も私の生活は変わらなかった。美保子は高給取りらしいが、相変わらず忙しいらしく、あまりこの家には来なかったが、樹は大学生になっても変わらず、二階の美保子が子供のころに使っていた部屋で勉強をし、忙しい大学生活を送っていたようだった。

樹は経済面で不自由はしていないはずだが、自分の家が母子家庭であることを子どもの頃から意識していて、高校生の頃から常にアルバイトをしていたし、大きくなってからは、何かを買ってほしいとか、何かをねだるようなわがままを言ったことはほとんどなかった。

それなのに、はじめてのわがままらしいわがままが、自分の異母兄弟と一緒に育った女の子を、自分の代わりにこの家に住まわせてほしい、だった。

樹は、すでに美保子に話を通し、泉を引き取ることで了承を取り付けていた。ひとりで大学の近くに安いアパートを借り、それまで貯金していたお金と、アルバイト代で家賃を払っていくつもりだと話した。

むこうの家とどういう約束事を取り付けたのか、詳しいことはあえて聞かなかったが、泉の親なり、後見人の役割をする保護者はどこかで生きているのだろうと予想している。彼女の学費と生活費は、美保子を通し、それぞれ学校と私に、遅れることなく送金されていた。

俺も詳しくは分からないんだ。ただ、子どもの頃に、澤井家に引き取られてきて、そこの一人息子と一緒に育ったらしい。

どうやら樹も、成人するまで泉の存在は知らなかったらしい。自分に異母兄弟がいることは知っていたが、最近まで連絡を取ったことはなかった、と。

連絡って、あんた、向こうのお子さんに会いに行ったのかい？

樹は私を安心させるように笑って言った。

手紙をもらったんだよ、澤野宗一郎さんに。その手紙に、書いてあったんだ。会いに来てほしい、これが最後だから、って。

美保子は、自分の父親について、樹の物心がついたときにきちんと話していた。向こうに一人息子がいることも。

樹は自分に父親がいないことも、母子家庭で育ってきたことも、苦には感じていない様子だったが、自分と血のつながった兄弟には関心があったのだろうか。まさか美保子も、樹が自分の異母兄弟とこっそり連絡を取り合うとは思ってもいなかっただろう。

樹が大学四年生の冬だった。

東京にも、舞うように細かい雪が降った日、泉は、真っ黒な短い髪をして、姿勢を伸ばして、この家の玄関口に現れた。小さなくたびれた革のボストンバックを持っていた。紺色のダッフルコートがよく似合っていた。

泉は、きちんと頭を下げ、それでも私を見つめる目には、一切の媚びを含んでいなかった。他人の家に世話になる、という事実を、ごくあっさりと、当たり前に受け入れていた。そこには自己憐憫も、同情を引くようことさら不幸ぶるしぐさも、一切感じられなかった。

むしろ緊張していたのは、隣に立った樹のほうだったろう。泉のことを何と呼んだらいいのかも分からず、ためらっていたようだった。

美保子も最初の頃は、この家に泉の様子を見に来たが、それなりに均衡が保たれているのを確認すると、またすぐに自分のマンションに戻った。

泉は、もうすでに高校生の年齢だったこともあるが、美保子より樹より手がかからない子だった。

泉は誰かに声をかけたがるような子ではなく、食事の支度や、家の手伝いを私に言われればきちんとこなしたが、それ以外はたいてい勉強するか本を読んでいるかのどちらかだった。

余計なことは一切話さないが、いつも外見ににじみ出る精神状態や感情が安定していて、ぶれることがない。稀有な境遇で育ち、それは大人の私から見ても決して幸福とは言えないのに、泉には他人の家で育った人間にありがちな卑屈さや臆病さが微塵もない。

よく躾けられた猫を一匹飼っているような気分だった。

近くにいる気配はするが、こちらの視線には入らない。食事の時間にはきちんと戻ってきて、またすぐにどこかにいなくなってしまう。

そして、私は、自分の生んだ美保子より、孫である樹より、血の繋がらない泉のほうが、本質的に自分と似ていることに気づいていた。

たったひとりで満ち足りているかんじ。

泉を見ていると、私もこうして一人で裁縫をしている時間が何より好きだったことを思い出す。周りに誰がいても、ひとりきりでも、うるさくても一向に構わない。細かく手を動かしていれば、自分の中にある、ボウルに入れた水のようなものが常に凪いでいて、その音を聞いていればいつまでも安心していられた。

泉は何の抵抗もなく、私が仕立てた服を着てくれ、そしてその装いがよく似合っていた。美保子に着せれば、いかにも保守的で流行遅れの布を無理矢理着せているような雰囲気だったのが、泉はもともと持っている色が少ないのか、体が既成サイズに近いのか、オーソドックスに仕立てた洋服が、嫌みなく似合っていた。

あの子は、樹の兄弟かい？

私は泉を引き取ると聞いたとき、真っ先に美保子に確認した。たぶん、早くから樹の気持ちに気づいていたからだろう。樹自身も自分の気持ちにうすうす気づいていたから、自ら家を出たのだろうし、厄介なことは当然避けたかった。

違うわ。

美保子はきっぱりと言った。もちろん違うわ。母親も父親も知ってる。祥太郎さんじゃない。

美保子の口からその名前を聞くのは二回目だった。それにね、美保子は続けて言った。

それはたぶん、樹も知ってると思うわ。